

編集委員会委員

岸井隆幸

KISHII, Takayuki

日本大学理工学部土木工学科

「政治主導」が叫ばれている昨今、中央官庁、いわゆる官僚組織の政策立案機能が停滞もしくは大きく減退しているように思われてならない。選挙で選ばれた政治家あるいは首長が、選挙時に提示した政策の実現に向けて責任を持つことは当然のことであるが、「政治主導」の名の下に、上位に座った政治家の命令がなければ行政組織は何も考えてはいけず、行政組織内の担当者が政策を語ることは許されない、というのはどう考えても無理・無駄を生じさせる。

短期的には、「指示待ち」による職務の停滞、調整機能が不十分なまま進む結果としての「手戻り」の発生など、時間的ロスが多い政策決定プロセスを導くことが懸念される。また、長期的に見ると、行政担当者が「考えることを忘れる」ことによって我が国組織の足腰が弱くなる、つまり「行政機能の劣化」を導くのではないだろうか。

こうした「政治主導」という考え方・動きは、「官僚主導」、「縦割り行政」、「天下り」、「官官接待」といった従来の行政組織の行動パターンに対する批判やこれまでの「政治家像」の脱皮を意識して展開されている一種の社会運動とも考えられる。つまり、「政治主導」という言葉が何か具体的な政策の内容と直接結びついているわけではなく、政策決定システムに関するある種のイメージを醸し出しているというのが実態であろう。

そして今の政治システムでは、この政策決定のトップダウン的手法(政治主導)の向かうべき「方向性と戦略」を実体的に示すのが、「マニフェスト」と呼ばれる各政党の選挙公約ということになる。国民・市民はこのマニフェストを読んで、比較考量して投票をし、その結果、「政治主導を実際に運営する者とその戦略」が選ばれる。ただ、マニフェストは全ての行政分野にわたって事細かにその内容が設定されているわけではないし、当然のことであるが、選挙という投票行動を意識して数多くの選挙民に心地よく響くフレーズが力強く打ち出されることが多い。よくよく注意しないと、結果として残るのは選挙民を喜ばせただけの「思いつき行政」、迎合政策の泥沼である。

ある政治学者は「歴史を紐解けば、ポピュリズムの後には独裁者が来ることが多い」と主張している。今の政治システムが結果としてポピュリズムの競争を生みだすとすると、次は人々(次の時代は高齢者が主役)が独裁者(面倒見てくれる親方)の出現を期待する時代が来るのかも知れない。もちろん、独裁者(親方)としてすべての分野の細かなところまで逐一自ら差配できるわけもない。従って、独

裁者(親方)は自らの意向に沿った「専門家」を代役として重用して、実際の運営にあたらせようとする。この場合、独裁者(親方)にとっての専門家とは「自分の意向を論理的に後付してくれる者」に過ぎないが――。

本誌購読者の多くは運輸政策分野に関連する専門家であると思われるが、こうした状況の中で今後専門家はどのような振る舞いをするべきであろうか？

まずはポピュリズムから意識的に脱却しようとする姿勢をとることが必要なのではないだろうか。世の中、あまりにおいしい話は何もおかしな仕組みとなっていることが多い。もちろん、社会一般に流れている話を無視して蜻蛉壺に入る議論をしようといっているわけではない。むしろ、蜻蛉壺から顔をだして大きな波の流れを感じるところから始め、最後に波からも顔を出すようなことが出来て、ようやくその波が何たるかを理解することが出来るのではないか、その外へ出て外から客観的に眺めてみようというマインドを持つことが専門家の役割・存在意義なのではないか、という意図である。大きな流れ・力と一定の距離を保ちつつ物事を外から見ようとするマインドが、結果として新鮮な刺激を生み、ポピュリズムや独裁制を超える次の地平を切り開く糧となると思われる。

政治主導の運動そのものを否定するつもりもないが、行政組織内部に育てていたインハウスの専門家集団がこうしたマインドを失い、上位に位置する政治家の顔色ばかりうかがい、完全に上意下達の一方通行的な関係だけが膨張するとすると、行政内部で全くチェック機能やフィードバック機能が働かず、下手をすると本当にポピュリズムあるいは独裁者の政治に近づいていく危険性がある。

行政に籍があろうとなかろうと専門家には心意気が必要であるし、同時に、是非、政策決定プロセスの様々な場面で、行政内外の様々な専門家が波から顔を出し、真の主権者たる国民・市民と意見を交換しつつ真剣な議論を交わし、その結果が適切に反映されるシステムが素直に構築されることを望みたい。

様々なボトムアップの仕組みを幾重にも内包するシステムをトップダウンエンジンで動かす、そういうシステムでなければ、民主主義社会の政治主導と呼ぶことはできない。我が国の成長を育ててきたのも、様々な場面で様々な工夫されたボトムアップによる衆知の結集であったのではなからうか。

我々は「政治主導」という名の「独裁政治家・独裁首長」を望むものではない。